

『#Butter』（柚木麻子著）を読んでみた。著者は、2008年『フォーゲットミー、ノットブルー』でオール讀物新人賞を受賞。『ナイルパーチの女子会』で山本周五郎賞を受賞。本作は、国内でも累計27万部突破。世界各国で大きな話題になり英国で26万部超、米国で10万部超のベストセラーになり、英国大手書店チェーンによる「Waterstones Book of the Year 2024」を日本人で初めて受賞した。現在は35ヶ国で翻訳が決定している。

3人の男たちの財産を奪い、殺害した容疑で逮捕されたKM。若くも美しくもない彼女がなぜ男を引き付けるのか。週刊誌記者のMは親友のRの助言をもとにKMの面会を取り付ける。フェミニストとマーガリンを嫌悪する（バターの紛い物だから）KMは、Mにあることを命じる。その日以来、欲望に忠実なKMの言動に触れるたび、Mの内面も外見も変貌し、友人や恋人らの運命をも変えてゆく。KMに指定された料理を食べ歩く（例えば、セックス後の深夜3時にバターラーメンを指定の店で食べる）。40年以上、私は妻に止められてバターを食べていない（もちろんマーガリンも）。本作に出て来る炊き立ての醤油バターかけご飯を無性に食べたくなるし、バターを使った菓子や料理は今すぐ食べてみたい。タイトルに相応しくバターの魅力を伝えている。

KMは男たちを本当に殺したのか。本作の主眼はそこにはない。食とジェンダー、社会的偏見（女性の容姿）を絡めて社会のゆがみ（男性を中心とした視線）を告発している。女性が男性優位社会に適応する、容貌を内面化する、身体が悲鳴をあげるまで働く、そんな生き方に疑義を唱える。すべての女性が自分で自分をケアしながら（例えば、容姿を気にせず、おいしい料理を作り食事をする）、その結果人々がゆるやかに連帯することを訴えている。単なる料理の本には興味は湧かないが、ミステリーと絡めるとこんなにも食への興味をそそるのはなぜであろう。

犯罪が絡むグルメ小説

『犯罪グルメへの招待』（森村誠一）

『タルト・タタンの夢』（近藤史恵）

『和菓子のアン』（坂木司）

グルメ小説としても秀逸な作品

『食堂かたつむり』（小川糸）

『みをつくし料理帖』（高田郁）

映像では『刑事コロンボ』に、ワイン通・グルメ通が出て来る。

私は町田暁雄氏が編集した『刑事コロンボ読本』（映画秘宝セレクション：2018年）を持っており、作品を視聴するごとに本書を参照した。

ワイン通は「別れのワイン」に登場する。カリフォルニアの高級ワイナリーの経営者で、ワインに人生を捧げた男。利益度外視で品質にこだわる職人気質。酸化したワインの味を一口で見抜くほどの繊細な味覚の持ち主。

登場するワイン：

- ・赤ワイン：ピノ・ノワール、ギャメイ、カベルネ・ソーヴィニヨン
- ・デザートワイン：モンテフィアスコーネ（実際は辛口）
- ・ポートワイン：フェリエ・ヴィンテージ・ポルト 45年物

弟がワイナリーを安酒メーカーに売却しようとしたことで犯行に至る。

「ワイン道の求道者」としての姿が印象的。

『刑事コロンボ』の「美食の報酬」で“料理評論家”が登場する。テレビ・ラジオ・雑誌など多方面で活躍している。レストランの評価を左右する絶大な権力を持ち、店の命運を握り、評価の見返りに金銭を要求する裏の顔を持つ。日本料理にも造詣が深い。イタリアン、中華、フレンチ、そして日本料理が登場する。イタリア料理店のオーナーが不正を暴露しようとしたため、ワインにフグ毒「テトロドトキシン」を仕込んで毒殺する。料理評論家という職業が持つ“権力”と“美学”が物語の核になっている。